

サザエさんをさがして



天然痘はヒトからヒトへのみ感染する。官庁に勤務していた患者の行動をたどり、国会内も消毒された。1973年4月、東京都千代田区

「天然痘は感染力が強いのに落ち着いたトーンですね」。当時の新聞を見て語るのは『感染症と文明』などの著書がある長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授。その理由として、天然痘は当時、予

年4月1日、バングラデシュから帰国した30代男性が天然痘と認定され、日本に緊張が走った。高い致死率で紀元前から人々に恐れられてきた天然痘だが、56年以降、国内での発生はなかった。男性は発症した日に出勤していたとわかり、2日の朝日新聞朝刊は1面で「全国規模で監視体制」と報じた。二次感染防止のため厚生省（現厚生労働省）は接触者を追う一方、300万人分のワクチンを用意し、男性の周囲の人々に種痘を実施。「警戒期は14日」など、新聞にはこれまた今と同じような見出しが並んだ。とはいえ、今とは状況は違ったようだ。

「接しよく者をたどっているんだ」カツオが刑事の捜査と勘違いしたのは、天然痘の接触者の追跡調査だった。「濃厚接触者」という言葉を日々聞くなか、「天然痘」を「新型コロナウイルス」に置き換えると、なんだか今の状況にそっくりではないか。

マンガ掲載の7日前の1973年4月1日、バングラデシュから帰国した30代男性が天然痘と認定され、日本に緊張が走った。高い致死率で紀元前から人々に恐れられてきた天然痘だが、56年以降、国内での発生はなかった。男性は発症した日に出勤していたとわかり、2日の朝日新聞朝刊は1面で「全国規模で監視体制」と報じた。二次感染防止のため厚生省（現厚生労働省）は接触者を追う一方、300万人分のワクチンを用意し、男性の周囲の人々に種痘を実施。「警戒期は14日」など、新聞にはこれまた今と同じような見出しが並んだ。とはいえ、今とは状況は違ったようだ。

40年後の新型コロナウイルス対策でもクラスター（感染者集団）潰しなど、接触者を追跡し封じ込める作戦が繰り返された。山本教授は「天然痘の成功体験は大きく、今の感染症対策にもその記憶が強く残っている気がする」と言う。

だが人類の「感染症制圧」の夢はすぐにはついていた。70年代半ば以降、エボラ出血熱、エイズと人類は次々とウイルスの新たな脅威にさらされた。山本教授は多くの感染症は人類の間に広がる中で弱毒化する傾向があると考え、「死者

天然痘根絶

「成功体験」が今に問うもの

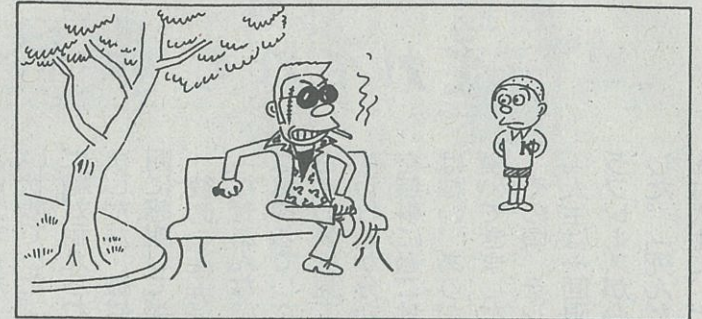
防疫種が実施されていたこと、感染すれば発症し、発症後にしか人にうつらないとわかっていただけことなどをあげる。「新型コロナウイルスのようにならぬ感染するならもっとパニックになっていたはず」

結局、二次感染はなく4月18日に対策本部は解散、男性も退院した。当時世界では天然痘は撲滅まであと一歩に迫っていた。患者、接触者を徹底追跡し種痘接種や隔離を行う作戦が奏功。77年以降、患者は見られなくなり、世界保健機関（WHO）は80年、世界根絶宣言を行った。人類が唯一撲滅に成功したとされる感染症である。

東京都立大学の詫摩佳代教授は、天然痘の撲滅にはWHOの功績が大きかったと近著『人類と病』で指摘する。

WHOの設立当初、米国はマリア撲滅事業を支援したのに対し、ソ連は天然痘根絶を提案。冷戦下、足並みはそろわなかった。が、マリア根絶が成功せず、ベトナム戦争で国際的な信頼を失墜させた米国は天然痘に着目し、協調へと転換。「資料を読むと専門家も協力しあっている。WHOは米ソ双方へ気配りし、両国の政治的思惑をうまく活用して全人口の8割のワクチン接種を実現させ、根絶へと導いた」と詫摩さん。

翻って今、WHOを舞台に米中の対立が激化している。「コロナの収束にはワクチンと薬の公平・公正な分配が必要。国際協力なしにはありえません」。天然痘根絶から見えるものは多い。（林るみ）



1973年4月8日朝日新聞朝刊 ©長谷川町子美術館

長く絶版だった姉妹社版『サザエさん』全68巻（各巻税込み880円）が長谷川町子生誕100年を記念して復刊しました。書店やASAでご購入いただけます。

